

第39回少年の主張秋田県大会・最優秀賞



認め合うということ

湯沢市立湯沢南中学校

3年 須原佳奈

「なんで私は、他の子みたいに、自分のお姉ちゃんと仲良くできないんだろう」

そう強く思う時期がありました。

私の姉は言語発達障がいという、自分の思いをうまく相手に伝えることができない障がいをもっており、他の人とうまくコミュニケーションが取れないことがあります。私はこの環境で育ったので、小さい頃は姉のことにに関して特に疑問をもつことはありませんでした。しかし、大きくなるにつれ、自分の姉が友達の兄弟と少し違うことに気づき始めました。姉はなぜ普通の会話ができないんだろう。私は姉を認めることができなくなりました。みんなと同じ考えをもつことができない姉。当たり前、常識と私たちが思っていることをなかなか理解できない姉。友達が自分の兄弟と仲良く話したり遊んだりしている場面を見ると私は羨ましくて仕方ありませんでした。「私もみんなのようにお姉ちゃんと仲良くしたい。でも、どうても無理。」いつもそう思って諦めていました。

「お姉ちゃん、どこの高校に行ってるの？」友達にこの質問をされる時、私は心が痛くなります。支援学校に行っているなんて言ったら、どう思われるか……。それが怖いのです。自分は弱いんだなって思います。自分を守るために姉のことを隠している。そんな自分は弱い。

一方、姉はどうでしょうか。姉は人にどう思われているかなどを気にして縮こまっているのでしょうか。いいえ、姉は今、支援学校で生徒会長として頑張っています。私よりできないことが多いはずなのに、自分のできることを一生懸命やって役割を果たそうとしています。自信をもってあいさつや発表ができるようになるまで、何度も何度も繰り返し練習しているのです。自分の人生を生き生きと一生懸命進んでいる姉を見ていたら、姉の良いところを何一つ認められず他の人の反応を気にしていた私の迷いなんて、ちっぽけなものにすぎな

いと思うようになりました。

思い返してみると、今私が夢中になっているバトンという競技は、姉がやっていたから出会ったものでした。姉は今はバトンをやっていませんが、大会があるたびに応援に来てくれます。この前の大会で私が悔しい思いをした時も、私の気持ちを理解してくれ、気を遣ってくれました。言葉ではなくさりげない行動の中に、私を慰めようとする思いを感じました。散々姉を悪く思っていたけれど、こんなふうに、小さい頃からいつも私のそばにそっと寄り添っていてくれたのはお姉ちゃんでした。今は「お姉ちゃんがいてこそ今の私がある」という思いでいっぱいです。

私は、みなさんに伝えたいことがあります。それは、「もっと理解する、認める心をもとう」ということです。障がいがある人を見たときの「あの人変じゃない?」「何言ってるかわからない」という言葉を聞くと、私は許せない気持ちになります。私たちと違うところがあるのは仕方がないんだ。その人なりに頑張っているんだ。私たちのようにできるようになりたいたいと思っても簡単にはできなくて、私たちの何倍も努力しているんだ。その努力を「見守って、応援する」みなさんにはその気持ちをもってほしいのです。

来年の春には社会人になる姉。姉は今、人の役に立つ仕事をしたいという願いをもって進路選択をしようとしています。姉がこれからも社会の一員として、自分らしく、みんなと関わりながら生きていくことを、私は願います。そして姉だけでなく、障がいのあるなしも関係なく、誰もが自分のできる努力をし、その努力をみんなが認めて応援する、そんな社会になることを私は願います。私はこれからも「言葉」以上の励ましをもらい、支え合って仲良く生きていくことでしょう。私は今年受験生。私の何倍も努力している姉の姿から刺激をもらい、私も頑張ります。